

グアムの米軍チャモロ人兵士・退役軍人をどう描くか
—「シンダル (Sindalu)」展について—

長島怜央 (法政大学)

1. はじめに

グアムでは住民と米軍の関係は密接である。まず米軍基地がある。アンダーセン空軍基地、海軍基地、海軍弾薬庫などがあり、島の面積の約 3 割が軍用地となっている。また、グアムは 1898 年以來アメリカ領であるため、住民にとって米軍は自国の軍隊であり、後述のようにチャモロ人を中心に多くの住民が入隊している。戦争の記憶も重要である。第 2 次世界大戦ではグアムは 32 カ月間日本軍に占領された。1944 年 7 月 21 日に米軍が再上陸し、日本軍からグアムを奪還したことから、グアムでは同日は解放記念日 (Liberation Day) として毎年祝われている¹。これらのことから、島のあちこちに第 2 次世界大戦やヴェトナム戦争などに関連した記念碑や慰霊碑などがある。そして、戦争体験や戦後の教育・メディアなどにおけるアメリカ化によって、チャモロ人がアメリカ人としてのナショナル・アイデンティティを持つことはごく当たり前のこととなっている²。

他方で、米軍基地の存在は、土地問題や環境破壊などの問題を生み出しており、それらの解決に多くの住民が取り組んできた。そうした取り組みは、脱植民地化運動やチャモロ・ナショナリズムともつながっている。周知のように、現在では沖縄からの海兵隊移転を含む米軍増強が進行中であり、米軍増強それ自体は歓迎する声がある一方で、具体的な計画の内容は多方面からの非難の的となっている³。

だがよく言われるように、グアムにおいて米軍、ひいては連邦政府やアメリカという国を批判することは難しいことである。多くの住民が米軍に入隊し、どこの家にも米軍関係者がいると言われるような状況では、それは想像に難くない。米軍への批判は島内の人間関係に深く影響する。

本稿では、米軍のなかのチャモロ人をテーマにしてグアムで開催された「シンダル」展 (2014 年 6 月 26 日～8 月 16 日) において、米軍、米軍基地、アメリカの戦争との関わりなかで、チャモロ人兵士や退役軍人が直面したレイシズムや植民地主義の問題がどのように取り上げられているか、チャモロ人のナショナル・アイデンティティがどのように示されているかを見ていく。グアムにおけるこれらのセンシティブな問題がこの展示でどのように扱われているのであろうか。

¹ 解放記念日や追悼・慰霊については、新井 (2015)、Camacho (2011)、Diaz (2003) を参照。また、本稿におけるグアムに関する記述については長島 (2015) も参照。

² チャモロ人のアイデンティティに関連したこれまでの研究を踏まえたものとして長島 (2015) を参照。

³ 米軍増強やそれに対する住民の反応については、多くの論考がある。さしあたり池田 (2010) や Natividad and Kirk (2010) を参照。

2. 展示の概要

シンダル (sindalu) というチャモロ語は、一般的に兵士 (soldier) や戦士 (warrior) を意味する (Topping et al. 1975)。インターネットで検索すると、チャモロ語話者の減少した現在でもこの単語はスポーツや格闘技の世界では使用されていることが分かる。展示会場で入手したチラシの裏面にはもう少し詳しく説明してある。この語は「われわれのコミュニティのなかで多くの意味を持つ。シンダルは、兵士を意味するスペイン語に由来し、戦士、防衛者 (defender)、および自由の戦士 (freedom fighter) を意味する。それは犠牲、奉仕、献身と同義でもある」 (Guam Humanities Council 2014)。「兵士」や「戦士」といった意味に留まらず、「防衛者」や「自由の戦士」といった肯定的な意味合いを帯びていったということになる。また「犠牲」「奉仕」「献身」とは、グアムだけでなくアメリカという国全体のためでもあろう。チラシには書かれていないが、そうした意味づけには、第2次世界大戦での米軍による日本の占領からの「解放」後のチャモロ人の歴史認識やアメリカ愛国主義が明らかに関係している。

この「シンダル」展は、全米を巡回しているスミソニアン協会の「旅の物語 (Journey Stories)」展とともに、グアム人文科学会議 (Guam Humanities Council) のもとで行われた。同会議は、人文科学関連の助成事業を行う連邦政府組織である全米人文科学基金 (National Endowment for the Humanities: NEH) の一支部である。「旅の物語」展はアメリカ国内の人びとの旅や移動の歴史をテーマにしている。「シンダル」展の副題が「チャモロ人の旅」であることから分かるように、このテーマに関するグアム側の展示として、米軍のなかのチャモロ人と彼らの旅や移動に関するものが選ばれたというわけである。資料の収集等には、グアム大学のチャモロ・スタディーズの教員であるマイケル・ベバクア (Michael Bevacqua) が関わっている。

なぜグアムにおいてこのテーマが選ばれたのか。前述のチラシにつきのように説明されている。

グアム人文科学会議がこの展示 (中略) を開催するのは、米軍で兵役に現在就いている、あるいは就いたことのある、チャモロ人の男性たちや女性たちの多くの重要な、そしてしばしば認識されていない旅を探るためである。この展示は、初期の出会い、軍隊の先駆者、たたえられていない英雄の物語に脚光を当てる。それは、人びとを兵役に就かせる力だけでなく、生き抜いていくことの勇気ある理由をも考察することである。アイデンティティと誇りについてだけでなく、人種的・政治的な従属についての、説得力のある、複雑な物語もまた提供される。さらに重要なこととして、痛ましくもあり喜ばしくもある帰還、市民兵 [引用者注: ナショナル・ガードの兵士] を中心としたコミュニティ、退役軍人が自分たちのこととして行っている取り組みを記録に留めている。 (Guam Humanities Council 2014)

グアム人文科学会議のウェブサイトによると、同会議のこれまでの活動には、「シンダル」展以外にも軍関係の企画がいくつか含まれている。軍や軍関係団体からの支援もあるようだが、住民の関心が高いことも、これらの企画の背景にあるだろう。そして、企画関係者には歴史学者や文化人類学者がおり、その顔ぶれを見ても、多様な視点を入れようとしていることが分かる。

今回の2つの展示は、以下の複数の組織から資金を得ている。全米人文科学基金、グアム芸術・人文科学機関会議（Guam Council on the Arts and Humanities Agency: CAHA）、グアム海軍士官配偶者コネクション（Guam Naval Officers' Spouses' Connection: GNOSC）。その他に、太平洋の島々で事業を展開する運送会社トリプル・B・フォワードーズ（Triple B Forwarders）、アガニヤ・ショッピングセンター（Agana Shopping Center）、地元新聞社マリアナズ・ヴァライアティ（Marianas Variety）が後援となっている。グアム・ナショナル・ガードを含むいくつかの組織からの支援も受けている。

展示期間中に、会場ではさまざまなプログラムが用意されていた。「学者（監修者）と観覧」、「教育者のワークショップ」、ミクロネシア連邦出身の米兵を扱ったドキュメンタリー映画『島の兵士（*Island Soldier*）』の上映会、フィリピン系退役軍人をたたえる会合、「数世代にわたる兵役」と題した兵役経験者たちの座談会、「退役軍人の詩とアートの夜」、などである。展示自体はチャモロ人の兵士や退役軍人のことしか扱っていないが、関連プログラムはチャモロ人以外の人びとの経験にも目を向けていることが分かる。

このときの展示会場は、政庁所在地ハガツニヤ（Hagåtña）のアガニヤ・ショッピングセンターの2階のギャラリーであった。筆者が訪れた7月下旬の水曜の午後6時前には受付の2名以外には誰もおらず、静かにじっくりと見て回ることができた。

この展示会場では、入って右側に「旅の物語」展のパネルが置かれ、左側の壁沿いに手前から奥に向かって「シンダル」展関連の40くらいのパネルが並べられ、6つのセクションに分けられていた。第2次世界大戦前から現在にかけて、だいたい年代順に並べられている。展示といっても資料は数点のみで、ほとんどパネルによる説明である。多数の写真とともに、さまざまな事象や人びとの経験が紹介されている。いくつかのパネルの見出しにはチャモロ語が併記されている。

展示全体を見ると、チャモロ人の兵士や退役軍人が米軍のなかであるいはアメリカの戦争のなかでどのような経験をしてきたか、彼らはそのような経験に対してどのような反応を示してきたか、どのような取り組みを行ってきたか、という要素から成っているとおおまかに捉えることができる。

米軍の帰還兵が抱える問題については、多くの報告がなされており、管見のかぎりでもいくつかの関連書籍が翻訳されており、日本でもよく知られている⁴。アフガニスタンやイラクでの戦争の影響も計り知れない。そうした戦争の代償については、この展示でもさ

⁴ 日本の新聞や雑誌でもこの問題に関連した記事を目にすることはあるが、まとまったものとしては反戦帰還兵の会／グランツ（2009）やフィンケル（2015）を参照。

さまざまな箇所で具体的な事例を交えて触れられている。チャモロ人コミュニティは、あるいはグアム社会は、これまでのアメリカの戦争で多くの負傷者や戦死者を出してきた。PTSD（心的外傷後ストレス障害）やTBI（外傷性脳損傷）に苦しむ人びとは少なくない。無事に帰還できた兵士でさえ、復員後に日常生活への適応に問題を抱えたりする。こうしたことが兵士の家族やコミュニティ全体にも深刻な影響をおよぼしている。そうしたグアムの状況に対して連邦政府の医療制度が機能していない問題も指摘されており、退役軍人組織による支援や政策提言の取り組みも紹介されている。また、展示ではわずかししか触れられていないが、アメリカ全体で問題となっている帰還兵の自殺の問題もある。

だがそうしたものとは別に、チャモロ人およびグアムに固有の問題への関心がこの展示を貫いている。以下で見るような、アメリカの植民地主義やレイシズムの問題である。なお、ジェンダーの問題についても展示の一部で取り上げられていることは付け加えておきたい。チャモロ人男性が受けてきた差別にくわえて、米軍のなかで女性兵士が受けてきた差別があり、チャモロ人女性兵士もそのなかにいた。

3. 植民地主義・レイシズムとチャモロ人兵士

(1) 第2次世界大戦前

展示の最初のセクションでは、第2次世界大戦前のチャモロ人と米軍の関係について説明している。パネル「チャモロ人の初期の軍の旅」によると、専制的な米海軍によるグアム統治のなかで、米軍に関連する地元組織として、「グアム海軍バンド」と「グアム市民軍（The Guam Militia）」（ナショナル・ガードの前身といえる）が存在した。1905年にある海軍軍人が、海軍の公式行事で演奏するために非公式のバンドを編成したのがグアム海軍バンドの始まりである。1918年になって、米海軍バンドがグアムで結成され、正規の米海軍のチャモロ人によって構成された。

グアム市民軍のほうは1917年に米海軍によって創設され、チャモロ人が加わった。16歳から23歳の男性は毎週水曜に最低2時間訓練を行うよう命じられ、23歳までに予備軍に移った。1936年には義務ではなく志願制となり、参加者数は1924年の1,140名から1939年の276名へと減少した。しかし、市民軍での経験は多くのチャモロ人にとって魅力的となっており、彼らを正規の米海軍の入隊へとつなげる役割を果たしたという。パネルには書かれていないが、軍隊が、社会的地位を高めるもの、さまざまな経験をもたらすものとチャモロ人の若者に認識されるようになっていたと思われる。この項目で言及されていることで興味深いのは、チャモロ人への米国市民権付与等を要求していたB. J. ボダリオ（B. J. Bordallo）がグアム市民軍での強制的な軍務に反対していたということである。十分な権利を与えられないまま義務を課せられることを問題としたのである。

パネル「グアムの海軍看護師」では、海軍看護師となったチャモロ人女性たちのことが書かれている。1901年に助産のクラスが開始され、1905年にはハガツニヤの病院で8名のチャモロ人女性が雇われるようになり、1911年にはチャモロ人看護師のための公式の養

成学校が設立された。その一方で、彼女たちは、家父長制的なチャモロ社会のなかで良く思われなかったり、海軍政府や病院の職員からの偏見や差別にさらされたりと、苦難に直面したと記述されている。

これらのパネルや項目では、海軍バンド、グアム市民軍、海軍看護師といった組織・制度を通じて、米海軍関連組織のなかに少しずつチャモロ人が入っていき、チャモロ人にとっては米軍がより身近なものとなっていった、ということが示されている。

つぎに、いくつかのパネルにおいて、この時期に米海軍に入隊したチャモロ人の処遇に関して記述された箇所を見ていく。パネル「最初の戦争：軍のチャモロ人先駆者 (I Primet Na Gera)」によると、米海軍にチャモロ人が入隊するようになったのは 1912 年のことである。だが、その数はごくわずかであり、入隊できたとしても食堂係などのもっとも地位の低い仕事に制限されていた。ただしごくわずかに掌帆長や下士官になった者もいた。そして第 1 次世界大戦の開戦によって、チャモロ人と米軍（とりわけ海軍）とのあいだの関係はより深いものとなっていったという。海軍に所属していたチャモロ人は、1915 年にはたった 35 名であったが、1917 年には 100 名以上になっていた。真ん中辺りのセクションにあるパネル「第 1 次世界大戦」では、この戦争でグアムが大規模な地域紛争に巻き込まれると想定されるようになり、チャモロ人はこの地域を守るために軍務に就く必要を感じはじめた、とされている。

パネル「チャモロ人食堂係」では、米軍における差別が取り上げられている。当時のアメリカは人種による分離が進んだ社会であり、グアムにも当然その影響はおよび、運動場、バー、学校で、そして映画館でさえも、白人とチャモロ人とで分けられた。米軍においても人種差別は行われ、チャモロ人は、メキシコ人、アフリカ系アメリカ人、フィリピン人と同様に、白人兵士よりも劣ったものとして扱われた。彼らが就くことができたのは食堂係や給仕（スチュワード）の階級であり、それはすなわち食堂の調理人として働くこと、および高級将校とその家族の台所係、調理人、使用人として務めることであった。そこから昇進することはほとんどなかった。給与水準も差別的であり、チャモロ人のなかには白人の半分か 4 分の 1 くらいしか受け取っていない者もいた。にもかかわらず、第 2 次世界大戦前に、数百名ものチャモロ人が海軍のスチュワードになるために入隊したのである。米海軍に入隊して特権を享受しながらも、食堂係などとして低い階級にとどまっているチャモロ人兵士が擲擧されることもあったという。ただし、他のパネル「他の軍種での昇進」にあるように、海軍以外の海兵隊や陸軍に入隊し、このような時代にもかかわらず昇進したチャモロ人もいる。

いずれにせよ、このパネルでは、アメリカ南部の人種差別・隔離体制（ジムクロウ）と同様のものがアメリカの植民地にもあったということが示されており、グアムもまたアメリカ社会のなかに一定程度組み込まれていたということを意識させられる。

(2) 第 2 次世界大戦後

それまでの戦争と同様に、第2次世界大戦では、黒人やインディアン（先住民）といった人種的マイノリティが派兵された。ただし、戦闘部隊に配置される者は限られていたし、人種分離政策がとられていた。いわゆる黒人部隊の第92師団（欧州）や第93師団（太平洋）、日系部隊の第100歩兵大隊や第442連隊のように、マイノリティによって構成された部隊の戦場での活躍はよく知られている。戦争末期には部隊の統合の動きもあった。戦後、米軍内の差別や分離政策に対する非難の声が高まり、1948年7月26日にトルーマン大統領によって行政命令が出されて以降、米軍の統合政策が進められていく。統合政策に消極的だった陸軍も、1950年になって黒人兵士の数を全体の10%に抑える制限を撤廃し、朝鮮戦争においてはもはや分離を維持できなくなった。1955年には黒人部隊はなくなるとされる⁵。

グアムのチャモロ人は、前述のように第2次世界大戦中にそれまでよりも多くの者が米軍に入隊し、そして戦後にアメリカ市民権を得るようになっていた。1946年7月には初の一斉帰化が行われ、海軍に所属する113人のチャモロ人（グアメニアン）にアメリカ市民権が付与された⁶。1940年国籍法のもとでは米軍に3年以上所属した者には市民権付与が可能であり、実際に第2次大戦の帰還兵である約600人のチャモロ人が戦後に帰化している（Rogers 2011: 196）。そうしたなか、アメリカ市民権付与や民政を求めるチャモロ人の運動がますます盛り上がっていき、1950年グアム基本法の成立にいたった⁷。

ヴェトナム戦争終結後のアメリカでは、いったん選抜徴兵登録は廃止され、その後に同制度は復活しているが、徴兵自体は1973年に停止されてからは行われておらず、実際には志願制となっている。グアムでも同様である。ちなみに、パネル「徴兵制」にあるように、1950年のグアム基本法によってチャモロ人はアメリカ市民権を得たため、選抜徴兵登録制度が適用されるようになった。それゆえ数多くのチャモロ人が朝鮮戦争やヴェトナム戦争で徴兵されることとなったわけである。そしてそのことが、後述のように、グアムの脱植民地化を求める運動にもつながっている。

さて、多くのチャモロ人が米軍に志願して入隊してきたが、いったいそれはなぜなのか。パネル「さあ行こう！（Fangahulo'）」は、この問いに答えようとしている。項目「新兵採用担当者（リクルーター）のパラダイス」によると、これまでグアムの多くの新兵採用担当者が好成績を修め、賞を受賞してきた。彼らはどれだけ多くの若者を軍に入隊させたかによって評価される。そうした仕事はグアムでは非常に容易なことであり、彼らにとってグアムのような島はパラダイスだというのである。「対テロ戦争」においても、2004年から2006年にかけての入隊者数は、戦地であるイラクやアフガニスタンに送られる可能性の高さからアメリカ全体で減少するなか、グアムでは2倍になっていた。

パネルによれば、それには経済的便益が主要な理由としてある。給与以外にも、保健医

⁵ 米軍の分離政策については、インターネット上にあるものも含めてさまざまな文献がある。それらを踏まえたものとして、軍隊と一般社会の関係について文化人類学的視点から論じた田中（2004）を参照。

⁶ この時期の「グアメニアン（Guamanian）」は実質的にチャモロ人のことである。長島（2015）を参照。

⁷ グアムと米軍の関係については、長島（2015）の第2章第3節も参照。

療、住宅ローン、職務経験、教育のための GI ビルなどが挙げられている。初期の頃から、兵役はよりよい人生を送るための機会と見なされるようになったというのである。ただし、それには経済的徴兵制や貧困徴兵制という見方もある。パネル「徴兵制」にある項目「貧困徴兵制」で指摘されているように、アメリカでは低所得者（非白人であることが多い）が他の選択肢がないために軍に入隊するということが生じている。グアムはその典型的なコミュニティであるという。

だがそれだけではない。パネル「さあ行こう！」の項目「愛国主義」にあるように、第 2 次世界大戦での日本の占領を終わらせたアメリカへの義務感というものもあった。この時期に、チャモロ人のアメリカに関する認識は、無関心で人種主義的な植民者というものから、愛情深い大切な解放者というものへ変化したという。パネル「第 2 次世界大戦」によると、米軍での兵役は島と家族を安全にするための方法と見なされるようになった。自分たちの生活の安全がアメリカ愛国主義と重ねあわされるようになったと見ることができる。前節で見たように 20 世紀前半を通じてチャモロ人と米海軍や関連組織との関係は密になっていったが、同大戦での経験は両者の関係において決定的なものとなったのである。ただし、すでにそれ以前から献身的にスチュワードや通訳としての任務を遂行するチャモロ人兵士が少なくなかったということも、パネル「第 2 次世界大戦」などから分かる。

それまでの戦争ではチャモロ人が入隊するのはほとんど海軍であったが、パネル「朝鮮戦争」によると、同戦争では陸軍に入隊する者が増加した。その結果、チャモロ人はキッチンから戦場へと舞台を移すこととなり、それゆえ、彼らは厳しい冬と激しい地上戦を経験した。後述のように、ベトナム戦争もチャモロ人にとって過酷なものとなった。

このように 20 世紀のアメリカのさまざまな戦争と 21 世紀初頭の「対テロ戦争」に多くのチャモロ人が関わってきたことの帰結として、しばしばグアムで言われるように、家族に米軍関係者がいない者はいないということや、家族代々米兵を輩出すること、戦争に参加することが珍しくないということがある。パネル「家族の遺産」はまさにそのことを取り上げている。そのなかで筆者も以前に読んで非常に驚いた 2013 年の『スターズ・アンド・ストライプス（星条旗新聞 *Stars and Stripes*）』紙の記事の内容が紹介されている。記事のなかで、アフガニスタンに送られているナショナル・ガードの一等軍曹の A 氏は、息子、甥 2 人、イトコ 2 人、義理の兄弟 2 人、義理の姉妹 1 人、義理の娘 1 人も一緒に現地にいると述べている⁸。国際治安支援部隊の各地の部隊に少なくとも 1 人は一族の者がいるという状況だという。そのほかに、2008 年にアフガニスタンでの任務の経験のある B 氏は、米軍で軍務に就くことは一族の血である、一族の伝統であると述べている。いくつかのパネルで示されているように、米軍に入隊すること、アメリカの戦争に参加することは、誇るべきこととして、多くのチャモロ人に肯定的に捉えられているということが分かる。チャモロ人のアメリカ人としてのナショナル・アイデンティティの形成は、米軍への入隊

⁸ この展示に出てくる人たちはすべて実名となっているが、ここでは匿名にしておく。

と各地への配置・派兵の歴史的な積み重ねによるところが大きいのではないであろうか。

パネル「チャモロ人戦死者」によれば、各戦争のチャモロ人戦死者は、「第2次世界大戦 59名、真珠湾 7名、ウェーク島 12名、朝鮮戦争 19名、ヴェトナム戦争 72名、湾岸戦争 2名、対テロ戦争（イラク、アフガニスタン、アフリカの角） 29名」となる。ここでもそうだが、グアムの他の記念碑の記述を見ても、真珠湾とウェーク島は、第2次世界大戦とは分けて表記されている。特別な出来事として認識されているということであろうか。このパネルでの「チャモロ人」は、グアムだけでなく北マリアナ諸島コモンウェルス（CNMI）とアメリカ本土のチャモロ人を含んでいるが、「対テロ戦争」より前の戦争ではほとんどグアムのチャモロ人のことである。他のパネルにも書かれているが、チャモロ人の戦死者数は人口の割に多い。たとえば、ヴェトナム帰還兵会（VVA）の1997年のグアムの帰還兵に関する決議によると、ヴェトナム戦争での戦死者は男性10万人あたりで換算すると、全米平均で58.9人、グアム出身者は149.8人となり（戦死者71名で計算）、グアム出身者の戦死者率は全米平均の2.5倍以上となる。また、前述のように、「対テロ戦争」についても、グアムにおける入隊者数や戦死者数の割合の高さが指摘されている。

同胞あるいは友人・家族の戦死の意味づけを取り上げているのが、パネル「悲しい到着」である。同パネルによると、戦死者はアメリカ国旗で覆われた棺桶に入ってグアムに戻ってきて、葬儀が行われる。人びとはその若い男性や女性の死を説明しようとする。愛国心があったことにくわえ、民主主義や自由を守るために死ぬ意志があったことを主張する者もいる。だが、これらの言葉が白々しく聞こえる者もいる。なぜグアムの兵士たちが、一部の国民に政治的な権利や参加を十分に与えないアメリカという国のために、世界の他の地域で戦い死ぬのか、それらは説明しないからだという。パネルには、グアム・ナショナル・ガードの戦死者の本部の建物の前にある慰霊碑の写真と、同ナショナル・ガードの「対テロ戦争」の戦死者のプレートの写真が掲載されている⁹。

4. 脱植民地化・土地問題への退役軍人の関与

(1) アメリカの理念の裏切り

グアムの退役軍人は、前述のような帰還兵の支援等だけでなく、他の社会運動にも参加してきた。代表的なものとして、グアムの政治的地位を変革して脱植民地化を達成しようとする運動や第2次世界大戦中・戦後に米軍によって接収された土地の補償・返還を求める運動がある。この展示においても、退役軍人がそれらの運動に関わっていく経緯がさまざまな部分で触れられている。ここではそれらを整理し、アメリカ愛国主義やチャモロ・ナショナリズムとの関係がどのように示されているかを見ていく。

パネル「脱植民地化における退役軍人」では、コモンウェルス運動への退役軍人の関わりが簡単に紹介されている。コモンウェルスとは政治的地位の一種で、グアムでは現在の

⁹ 「対テロ戦争」における米軍のチャモロ人戦死者の扱いに関する考察として Bevacqua (2010) がある。

地位よりも自治の程度を高めるものとして位置づけられている。1980年代に住民投票を何度か経て、グアムでは新たな政治的地位としてコモンウェルスを連邦政府に求めるようになったが、1990年代半ばには交渉が行き詰まってしまった。このパネルでは、多くのチャモロ人退役軍人がコモンウェルス運動を積極的に支持し、すべての者に民主主義や自由を保障するという中心的原理に従うようアメリカに要求した、と解説されている。

そのなかで、海兵隊員であった第2次世界大戦帰還兵のピート・シグエンサ (Pete Siguenza) がコモンウェルス運動のなかで発した、1980年代後半から1990年代前半のものと思われる言葉が紹介されている。「私は自分がチャモロ系のアメリカ人 (an American of Chamorro ancestry) でありうるという考えが矛盾したもの、両立しないものとは思いません。われわれが生きているあいだにわが島が要求しているコモンウェルスの地位が実現するというのが、私が熱心に祈っていることであり、第2次世界大戦時の私の仲間のチャモロ人退役軍人たちの祈りでもあります。この熱望はアメリカを本当にこれまで以上に美しくするはずです」。ここには、愛国主義的な立場からアメリカの植民地主義を追及する姿勢が見出せる。

パネルには「いますぐにコモンウェルス (Commonwealth Now)」というスローガンとともにそのシンボルとしてロゴが掲載されている。帆を張ったアウトリガーカヌーが右側に向かっており、その左側には3つの星が描かれている、躍動的なデザインである。展示側が付けたキャプションには、このロゴは「アメリカとの密な関係を保とうという望みが表象されているが、チャモロ人にとってより衡平な (equitable) 未来に向かって航海するということでもある」と当時の人びとの認識について書かれている。

このようにコモンウェルス運動それ自体は、脱植民地化を求めているとはいえ、アメリカ愛国主義とだけでなく、チャモロ・ナショナリズムとも同じものではない。グアムの政治的地位は、愛国主義からも、チャモロ・ナショナリズムからも、屈辱的なものとされた。愛国主義はアメリカとより近い関係を築くものとして、チャモロ・ナショナリズムはチャモロ人の自己決定権を行使する前段階として、コモンウェルスをつまっていた。コモンウェルス運動というアウトリガーカヌーには、アメリカ愛国主義もチャモロ・ナショナリズムも呉越同舟のように乗り合わせており、それぞれが重要な役割を果たしていたという言い方ができる。

土地問題においても、愛国主義的な立場からの批判が見られる。「土地 (Tāno') : チャモロ人退役軍人を急進的にする」のパネルでは元海軍潜水艦乗組員のトニー・アルテロ (Tony Artero) が取り上げられている¹⁰。アントニオおじさん (Tun Antonio) として知られる父親は日本占領中に海軍兵士ジョージ・トゥウィードをかくまったことで有名である。その行為によって彼は1946年に大統領自由勲章を授与された。

パネルに書かれているように、その一方でアルテロ一族の土地は戦後に米軍によって接

¹⁰ アルテロ一族とトニー・アルテロについては Stadel (1998: 178) も参照。

収されてしまった。一族は大地主であったが、島北部の所有地の大部分を失ってしまい、正当な補償を受けられなかった。しかも、海軍と空軍によって残された有害な廃棄物のために、残された土地を使用することも制限された。トニー・アルテロは、土地喪失のために一族が苦しんできた不正義について、何年にもわたって、文章を発表したり、証言を行ったり、手紙を書いたりしてきた。彼が主張したのは、チャモロ人の扱われ方は、アメリカが建国された原理、そして彼が海軍にいたときに犠牲となり戦った原理に反しているということであるという。

パネルに示されたアルテロのこうした愛国主義的な考えは、同じパネルに掲載された、星条旗の前に立つ彼の写真にも表れている。彼は米軍の土地接収、土地政策を厳しく批判した。パネルには書かれていないが、その点ではチャモロ・ナショナリストたちと共鳴していた。チャモロ・ナショナリストの住民団体 OPI-R (Organization of People for Indigenous Rights) のマニフェストとも呼ばれる『チャモロ人の自己決定』という書物に彼の文章「あるチャモロ一族の悲劇——土地と米軍」(Artero 1987) が所収されていることもその一例である。しかし、グアムとチャモロ人がアメリカの原理に則って扱われ、それによって土地問題が解決されることを主張したという意味で、彼はあくまでも愛国主義的にアメリカを批判したのである。

パネル「チャモロ人の闘争」で紹介されている3名のうちのひとりが、チャモロ・ナショナリストの住民団体ナシオン・チャモルの初代マガラヒ(リーダー)であるエインジェル・サントス(Angel Santos)である。1990年代に、米軍に接収された土地の問題に直接行動によって積極的に取り組んだほか、さまざまな問題について、連邦政府、米軍、グアム政府への批判を展開した。1975年に制定されたものの実行されないままになっていたチャモロ土地信託法を1990年代に始動させたのも彼の功績とされる。

そのサントスももともとは非常に愛国主義的といえる人間であった。パネルにも書かれてあるように、それには10歳のときに教会の侍者としてヴェトナム戦争の戦死者の遺体に接したことが関係している。そのときに彼の両親が言ったのは、その戦死者はサントスの自由のため、世界中のあらゆる人びとの民主主義のために死んだのだということである。サントスは自分も彼のようにになりたい、もし徴兵されるなら血を流し、彼のように死のうと誓ったという。そして、彼は高校卒業後、空軍で13年間務め、殊勲を立てた。だが彼の娘が2歳のときに神経芽細胞腫で亡くなり、のちにそれが当時住んでいたアンダーセン空軍基地の飲み水の汚染が原因であり、米軍がそれを隠していたということが分かった。それにより、サントスは脱植民地化や土地返還を強く訴え、それらを妨げていると見なした連邦政府・米軍やグアム政府を厳しく批判し、反米的と見なされるようになるのである。

サントスはチャモロ・ナショナリズムの中心的存在となったが、もともとはアメリカの理念を信奉する愛国主義的な兵士であった。米兵である一方で、土地問題等においてアメリカあるいは連邦政府の裏切りを感じ、愛国主義の反動で、あるいはそれ故か、チャモロ人としてのアイデンティティを強めていったのである。

(2) レイシズムの体験

1990年代のナシオン・チャモルを中心とする運動には多くの退役軍人が含まれていたことはよく知られている (Camacho and Monnig 2010; Stade 1998)。この展示においても、チャモロ人としてのアイデンティティを前面に出しながらアメリカや米軍に批判の矛先を向けざるをえなかった退役軍人に一定の記述を割いている。とりわけ、その契機となった舞台として言及されているのはヴェトナム戦争である。

パネル「ヴェトナム」からは、ヴェトナム戦争が、チャモロ人兵士、その家族、チャモロ人コミュニティあるいはグアム社会に与えた深刻なダメージが読み取れる。他の兵士たちと同様に多くのチャモロ人兵士たちも、過酷な体験が原因で、ヴェトナムの都市部で薬物を使用した。また、第2次世界大戦とは異なり、ヴェトナム戦争に意味を見いだすことは多くのチャモロ人には困難であったという。

その隣では、ヴェトナム帰還兵のデイヴィッド・ルハン・サブラン (David Lujan Sablan) が、パネル1枚を使って紹介されている。サブランは、同戦争で上官に高く評価され、リンドン・ジョンソン大統領から青銅星勲章を授与された。その一方で、その後はチャモロ人の権利活動家として知られるようになり、1990年代にはナシオン・チャモルのメンバーとしてエインジェル・サントスと行動をとともにしていた。また、回顧録を出版しているほか、画家としても活躍している。パネルには書かれていないが、アメリカ市民権を放棄すると述べたり、前述の勲章を返還したりしたことなども付け加えておきたい (長島 2015: 213)。

パネルでは軍隊でのレイシズムやいじめについてのサブランの経験が触れられている。彼は指揮官にもっとも危険な任務に就かされることがよくあったという。そのなかでも、彼が上官に異議を申し立てたときのことが書かれている。サブランが長いパトロールから戻ってきて、座って食事や休憩をしていたとき、一等軍曹が彼と1人のアフリカ系アメリカ人に再び戦場に行くように命令した。だが、そこには長い間休息している多くの白人がいるのになぜ彼らを選ばないのかと、サブランは上官を批判したのである。その結果、軍法会議にかけられ、軍の拘置所で3カ月間過ごすこととなった。

もうひとつの話は、その拘置所でのことである。そこには他の人種集団の4倍の数となる400名のアフリカ系アメリカ人がおり、あるとき彼らによる暴動が起こり、憲兵に鎮圧され、多くの囚人が死傷した。この話も米軍内での人種間の差別・不平等とそれに対する不満の鬱積があったことの実例として語られている。パネル右下の写真には、サブラン所有のヴェトナムでのアフリカ系アメリカ人兵士たちの写真が掲載されており、さまざまな差別の経験ゆえに、サブランはアフリカ系アメリカ人との連帯感や同類意識に気づいたということが書かれている。

同様のことはヴェトナム帰還兵フランク・サンニコラス (Frank San Nicolas) によっても言及されている。彼については、退役軍人に関するセクションで、パネル1枚使って取

り上げられている。彼は戦闘の経験によって帰還後も苦しんだが、PTSD と診断されたのは帰還から 30 年以上も経ってのことであった。サンニコラスがサントスらと土地の問題に関わるようになったのは 1990 年代半ばである。彼の家族の土地も第 2 次世界大戦後に米軍に接収されたということが分かったのである。ヴェトナムで他の有色人兵士やブラック・パワー運動に共鳴したということも書かれており、それがのちの彼の活動に影響したことが示唆されている。また、彼の言葉からは、現在の戦争でもグアムから多くの人びとが戦場へ行っていることを憂慮していることが分かり、厭戦的な考えが伺われる。

前述のパネル「チャモロ人の闘争」では、アメリカのために戦うチャモロ人兵士が、レイシズム、低い給与とわずかな手当、限られた昇進の機会から、家族やコミュニティから遠く離れた土地で自らの命をかけることまで、多くの難題に直面したとし、3 名の経験が紹介されている。そのひとりであるジョー・ガリド (Joe Garrido) もヴェトナム戦争での体験を語っている。

ジョー・ガリドはチャモロ人の権利のために長年にわたって活動してきた。ガリド一族もアルテロー族と同様にもともと広大な土地を有しており、土地問題にも強い利害関心を持っている¹¹。ガリドは、ナシオン・チャモルの 3 代目マガラヒを務めたこともあり、グアム脱植民地化委員会の自由連合タスクフォース長でもある。パネルには、ヴェトナム戦争中に海軍で言語差別を経験し、上官に抗議した彼の経験が書かれている。1971 年のある日、ガリドは監督者の事務室に呼ばれ、仕事にチャモロ語を話さないように言われた。その後、仕事場は「^{イングリッシュ・オンリー}英語のみ使用可能」であることを意味する標識が掲げられるようになった。しかし、ガリドの同僚はみなチャモロ人だったので、チャモロ語のほうが仕事でもコミュニケーションがとりやすかった。そこで、アフリカ系アメリカ人でありチェロキーである監督者に、共有する抑圧の歴史に基づいて「あなたがたに行われていることをあなたは現に行っているのですよ」と訴えた。アメリカ国内のマイノリティ集団に属する監督者が他のマイノリティへの差別に加担しているということをガリドは批判したのである。翌日、その監督者は標識を取り外したという。

これらのパネルからは、ヴェトナム戦争でのレイシズムや差別の経験や他のマイノリティとの交流が、グアムに戻ってきてからのサブランやサンニコラスやガリドのチャモロ人の権利の活動へとつながっているということが読み取れる。そして、これらは特殊なケースではなく、他のチャモロ人もたどった道である。

また当然のことながら、こうしたマイノリティや被植民者同士の共鳴は、チャモロ人のみ見られたものではない。ヴェトナム戦争の時期には、在日米軍基地（三沢基地や岩国基地など）や沖縄の米軍基地でも人種間の対立が表面化していた。沖縄では基地の外の住

¹¹ 筆者のインタビューによると、ガリドは 1980 年代末にグアムのチャモロ人の状況に明確に問題意識を抱くようになり、ナシオン・チャモルの活動に参加し始めたという。土地問題をとっかかりとして、グアムの脱植民地化およびチャモロ人の自己決定権の問題に取り組むようになったのである。また、彼はチャモロ土地信託法にもグアム先祖伝来地法にも肯定的であった。2004 年 6 月 24 日、ハガツニヤのラッテストーン公園にて。土地問題とこれらの法律については長島 (2015) を参照。

民にもそのことは認識されており、なかには黒人との連帯意識を持つ者もいた。その一方で、黒人指導者の側も世界各地の脱植民地化運動を自分たちのレイシズムに対する闘いと結びつけていた（古川・古川 2004: Ch.3）。そうしたことを踏まえると、ここまで見てきたようにヴェトナムでの経験についてのチャモロ人兵士のさまざまな証言はあるが、グアムの米軍基地の黒人などのマイノリティ兵士と地域住民（とりわけチャモロ人）のあいだの交流がどのようなものであったかも探究すべきテーマのひとつといえる。

5. おわりに

「シンダル」展は、米軍やアメリカの戦争を取り上げていることになるが、戦争を賛美するでもなく、反戦や平和を訴えるでもない。いわゆる軍事博物館、戦争博物館、平和博物館の展示とは異なる。そこに示されているのは、グアムのチャモロ人が米軍との関係において、および米軍のなかで、懸命に生きてきたという事実である。

そうした全体的なトーンのなかに、植民地主義やレイシズムへの問題関心が収まっている。本稿では展示全体を満遍なく触れることはしなかったため伝わりづらいかもかもしれないが、この展示は人びとの多様な経験や物語や主張を織り交ぜている。できるだけ多くの人びとの心情に寄り添おうとしていると言ってもいいかもしれない。チャモロ人兵士の軍隊生活が親しみやすく描かれたり、国や故郷・家族あるいは世界のために働いているという誇りが強調されたりもする。直面する困難を乗り越えた、あるいは乗り越えようとしているさまざまな人びとが登場する。米軍や連邦政府への批判にも国を愛する気持ちが根底にあるということが多くの箇所に書かれている。チャモロ人の運動は、チャモロ・ナショナリズムや先住民運動としては描かれていないし、それらの言葉は用いられていない。アメリカというナショナルな枠組みあるいは境界を越えないようにする慎重さが見られる。

これらは、アメリカや米軍との関係においてあるいはグローバル化のなかでチャモロ人が直面してきた問題の根源に、この展示がぎりぎりのところで触れようとしないということとも関係している。たとえば、貧困徴兵制のような問題が生じているのはなぜか、アメリカがこれほどまでに戦争を行ってきたのはなぜか、などである。

それに関連して、チャモロ人の苦難や葛藤とその克服、そしてアメリカ愛国主義が強調されるあまり、アメリカの戦争の被害者という他者がこの展示からはまったく欠落している。これは米軍のなかのチャモロ人をテーマとしている以上は仕方のないことかもしれない。しかしそれゆえにこそ、この展示はグアム内外において軍事や戦争に関する議論を発展させる可能性を有しているということは指摘しておきたい。

グアム社会の軍事化はこれまで論じられてきたことであるが、それはこうした展示にも影を落としているであろう。グアムでは米軍やそれに深い関わりを持つ人びとの存在がこうした展示には反映されてしまう。当然のことながら、実際に展示内容を作る側（送り手）は、企画する側、助成する側、観る側（受け手）のことを意識せざるをえない。これは展示というメディアの社会的性質である。「シンダル」の場合も、米軍や米軍関連組織から

の助成や支援があり、広く一般の人びとに観られるということは、重要な意味を持ったであろう。

しかしながら、この展示が軍事化の進んだグアム社会に一石を投じたということは確かである。前述した展示関係者のマイケル・ベバクアは地元紙の記事でつぎのように述べている。「このような機会にとっても感謝しています。なぜなら、チャモロ人の軍隊での経験は『アメリカ (the United States)、我が家、我が島を守るために戦う』と言う兵士に還元することがとても容易だからです」。「それは重要な部分ではあります。しかし他方で、チャモロ人の経験はそれ以上にずっとややこしく複雑なのです」(Whitman 2014)。この展示は、米軍やアメリカの戦争について多様な観点から考える貴重な機会をグアムの人びとに提供しているのである。その後も、2014年8月から10月にかけてグアム大学で、2015年1月から3月にかけてアガニヤ・ショッピングセンターで、この展示は開催された。

【謝辞】

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「軍事が地域社会に及ぼす影響に関する総合的研究」(2013年度～2015年度、研究代表者：朝井志歩)による研究成果の一部である。調査にご協力いただいた方々に、記して感謝申し上げます。

参考文献

新井隆

2015「グアムにおける戦争の記憶の表象——追悼・慰霊の場から考える」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』111: 1-12.

池田佳代

2010「グアム島における米軍再編計画——ワン・グアム言説を中心に」『文明科学研究』広島大学, 5: 35-52.

田中雅一

2004「軍隊の文化人類学的研究への視角——米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって」『人文学報』京都大学人文科学研究所, 90: 1-21.

長島怜央

2015『アメリカとグアム——植民地主義、レイシズム、先住民』有信堂高文社.

反戦イラク帰還兵の会／アーロン・グランツ

2009『冬の兵士——イラク・アフガン帰還兵が語る戦場の真実』TUP 訳、岩波書店.

フィンケル, デイヴィッド

2015『帰還兵はなぜ自殺するのか』古屋美登里訳、亜紀書房.

古川博巳・古川哲史

2004『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』明石書店.

Artero, Tony

1987 "A Chamorro Family Tragedy: Land and the U.S. Military," Laura Souder-Jaffery and Robert A. Underwood eds., *Chamorro Self-Determination: The Right of a People*, Guam: MARC, 91-101.

Bevacqua, Michael Lujan

2010 "The Exceptional Life and Death of a Chamorro Soldier: Tracing the Militarization of Desire in Guam, USA," Setsu Shigematsu and Keith L. Camacho eds., *Militarized Currents: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 33-61.

Camacho, Keith L. and Laurel A. Monnig

2010 "Uncomfortable Fatigues: Chamorro Soldiers, Gendered Identities, and the Question of Decolonization in Guam," Shigematsu and Camacho eds., 147-79.

Camacho, Keith L.

2011 *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands*, Honolulu: University of Hawai'i.

Diaz, Vicente M.

2001, "Deliberating 'Liberation Day': Identity, History, Memory, and War in Guam," T. Fujitani, Geoffrey M. White and Lisa Yoneyama eds., *Perilous Memories: The Asia-Pacific War (s)*, Durham: Duke University Press, 155-80.

Guam Humanities Council

2014 "Sindålu: Chamorro Journey in the U.S. Military," the exhibition flyer.

Natividad, LisaLinda and Gwyn Kirk

2010 "Fortress Guam: Resistance to US Military Mega-Buildup," *The Asia-Pacific Journal*, 19-1-10.

Rogers, Robert F.

[1995] 2011 *Destiny's Landfall: A History of Guam*, Revised Edition, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Stade, Ronald

1998 *Pacific Passages: World Culture and Local Politics in Guam*, Stockholm: Stockholm University.

Topping, Donald M., Pedro M. Ogo and Bernadita C. Dungca

1975 *Chamorro-English Dictionary*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Whitman, Frank

2014 "'Sindålu: Chamorro Journeys in the US Military' Opens Today," *Marianas Variety Guam Edition*, June 26.